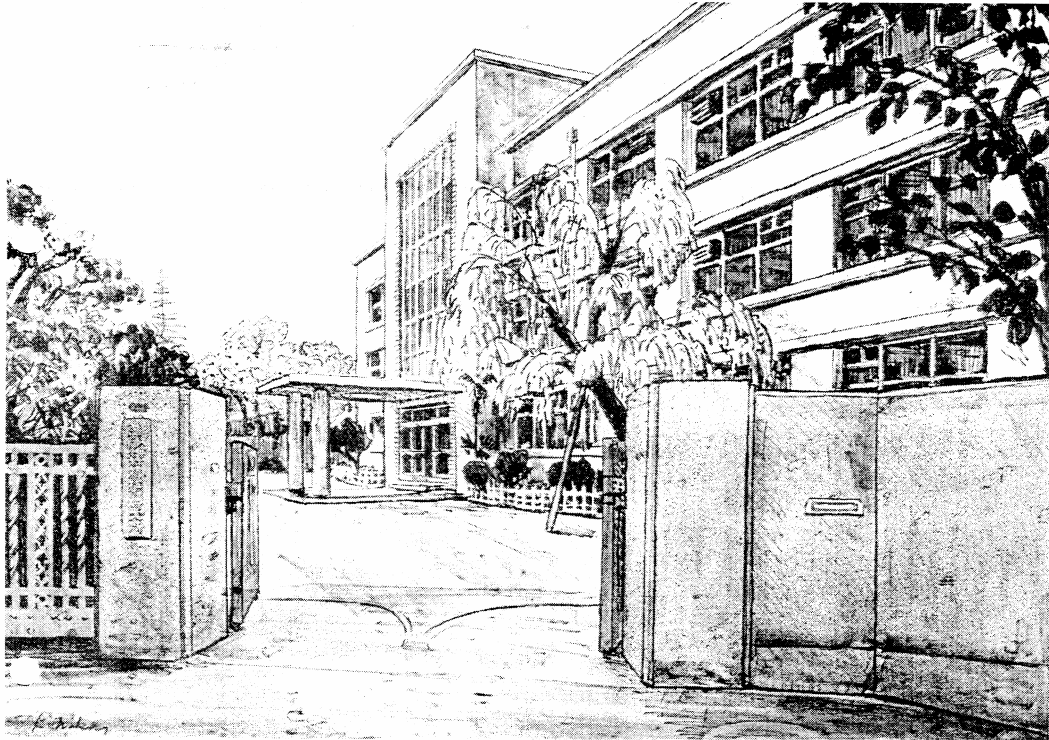


早稲田材料工学会会報

1997. 3 NO. 4



スケッチ：中 喜一氏（元早大職員）のご厚意による

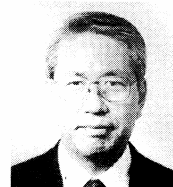
目 次

| | |
|---|---|
| ■副会長挨拶（小泉達也） | 2 |
| ■材料工学科の1年（南雲道彦） | 3 |
| ■材研における粉末冶金研究の思い出（渡辺尙尚） | 4 |
| ■昭和初期の早稲田・牛込界隈の思い出（中井弘） | 4 |
| ■新博士紹介 | |
| ・シャドマスク用Fe-36%Ni合金に関する研究（津田正臣） | 5 |
| ・高密度実装はんだ付け継手の機械的信頼性に関する研究（曾我太佐男） | 6 |
| ・機械構造用金属部材の複合化に関する研究（堺邦益） | 6 |
| ・モリブデン鋼系耐摩耗焼結材料の製造ならびにそれらのエンジンへの応用に関する研究（藤木章） | 6 |
| ・多結品の位相構造に関する研究（中村修一） | 7 |
| ・溶融Al合金とSiCとの濡れと反応に関する研究（佐藤健二） | 7 |
| ・繊維成形体への溶融アルミニウムの加圧含浸挙動の研究（山内利夫） | 7 |
| ■就職担当を終えて（堀部進） | 8 |
| ■寄付 | 8 |
| ■編集後記 | 8 |

副会長挨拶

台北での偶然の再会

早稲田材料工学会副会長
(古河電気工業株式会社取締役) 小泉 達也



昨年(2019年)の12月、私にとって2度目の訪台の時である。高尾と台北での仕事の後、私は一日予定を延ばして台北に居残った。20余年ぶりに彼に会うためである。約束の場である貿易センタービルの上階にある工業倶楽部に赴き受付に来意を告げると立派なロビーに通された。待つこと数分、大きな身体を洗練された中国風のカジュアルに包みゆったりとした足取りで歩み寄った彼は私に手を差し伸べた。笑みをたえた端正な顔は知性と自信に満ち、正に大人(たいじん)の風格であった。「髪は白くなったがお互いにびっくりする程には変わっていないナ」と言い合いながらもお互いに四半世紀の時間の重みを感じさせるのに十分な再会の瞬間であった。倶楽部の立派な個室のダイニングルームに通され、それから3時間あまり、彼の卒業後の足跡にまつわる話にすっかり引き込まれてしまった。

昨年5月の初めての訪台の時まで、私は彼がまだGEカナダで仕事を続けているものばかり思っていた。ところが偶然といえば偶然、私は旧知の台湾国立中央大学の欧先生と雑談している時に、ふと大学の研究室で一緒だった台湾からの留学生のことを思い出し、何気なく彼のことを口にした。「名前を覚えていますか?」と尋ねられたので、「日本流の読み方では、せき しげよし(石 滋宣)氏、1996年に早稲田の金属工学科を卒業して東大の大学院に進み、今はGEカナダにいる筈です。」と答えた途端、欧先生は驚いて「その方なら台湾の生産力中心の総経理をされている石さんに違いありません。もう随分前から台湾に戻っておられて、今や閣僚級の指導者の一人になっています。産業界では知らない人はいないほどですよ。」と言い、畳み掛けるように夢中になって彼の活躍ぶりを話してくれた。最近も経済部長(通産大臣)に推されたが、家族をカナダに残し自身もまだカナダ国籍を保持していることから就任を辞退したとのこと。また現在総経理(理事長)を務める「生産力中心(センター)」は台湾の産業の近代化に大きく貢献してきた重要な機関であり、石氏抜きでは語れぬほど彼の存在は大きいということだった。また自国の産業に貢献するばかりでなく、最近では発展途上国へも指導の手を差し伸べているという。毎週のようにテレビ番組にも登場し産業界の指導者として重みのある発言をしているので「今では一般の人でも知っている著名人ですよ。」と欧先生は話を結んだ。そして別れ際に「生産力中心を通じて小泉さんのことを石さんに伝えておきましょう。」と付け加えた。

そのような背景で実現したのが今回の彼との再会である。研究室時代の昔話をそこそこに切り上げ、カナダに渡ってから台湾に戻るまでの経緯を興味深く聞いた。

GEに入社して先端技術部門のマネージャーとなった彼は世界中の最先端技術に接し、また工業先進国がより付加価値の高い産業領域にシフトしていく様子をつぶさに見て自国台湾の現状と将来について深刻な思いにとらわれたという。そして思い余って時の経済部長(通産大臣)に手紙を出した。旧来の労働集約型の低付加価値産業に依存している現状を憂え、産業の近代化に向けて大胆な改革を行うべき、と率直な意見を書いたところ予想外に早いリスポンスを受け取った。一時帰国の要請であった。早速休暇を取ってそれに応えたところ、台湾の国営企業数社の工場診断を依頼された。振り返って見ればそれが実力を試される機会であった。正鵠を射た彼の診断レポートは大変な反響を呼び、遂に彼は単身カナダを離れて故国の産業の近代化に身を投ずる決意をする。国営企業を中心とした基幹産業の生産性向上と技術のレベルアップ、エレクトロニクスを中心としたハイテク分野の育成を強力に推し進めるうちに居なくてはならぬ存在となり、遂には家族のいるカナダに「帰国」する機会を失し今に至ったという。エレクトロニクスを始めとする台湾の産業の目覚ましい発展のスタート時期が

彼の戻った時期とほぼ重なることから、台湾での彼の貢献度の大きさが窺い知れる。民主化の方向に向いていたとはいえ、なお政情不安定な中であって、政治に翻弄されることなく故国の産業の近代化にひたむきに取り組む彼の姿勢は多くの人たちの共感を得たに違いない。きちんとした技術観をベースにして現場現物主義に徹し、鋭い分析力と深い洞察力に裏打ちされた彼の言葉が大変な説得力を持ったであろうことは想像に難くない。産業近代化の「台湾モデル」の成功に大きく貢献した彼は、最近香港にもしばしば出かけ中国本土の技術者の指導にも熱心に取り組んでいるようだ。またマハティール首相を始めASEAN諸国や中南米諸国の指導者からもしばしば声がかかると聞いた。

異国の企業に働く一介の材料技術者から救国の士への変身、そして祖国の指導者へ、さらには国内内外を隔てぬ良き指導者、良きメンターへと発展し続ける彼のエネルギーの源泉は一体何であろうか。異郷で働く若きエンジニアの言うことにも耳を傾け、その提言と意欲を買って機会を与えた当時の経済部長の度量の大きさにも感服させられる。故国への強い想いが直接の動機ではあったであろうが、そのような人との出会いも大きい。台湾の工業高等専門学校を卒業してから兵役を終え、高度成長期の日本に来て、学部編入し、さらには大学院を出て北米最大の総合電機メーカーに務めるというグローバルな歩みを経てきた彼を一貫して支配し続けたのは、実は故国の産業立国という大きなテーマであったのだ。

別れる時、彼の著作と語録、それにビデオをもらった。産業界の人々に向けた講話のようなものであった。完全な読解は無理だが意味は読み取れる。政治家でもなく、官僚でもない。学者でもなく、企業家とも異なる。愛国者ではあるが国粋主義者ではない。彼のような異色のリーダーを高度成長期に得たことは台湾にとってはまことに幸いであったと思う。

人との会話の中の偶然から私は旧友と再会した。しかし旧友との再会というよりは、立派な大人との新たな出会いであったような気がする。彼のような人物が出たことは材料工学会の1メンバーとしてまことに喜ばしいと思った。会のメンバー諸兄姉にも知って頂きたいと思いこのスペースを拝借した次第である。

材料工学科の1年

学科主任 南雲 道彦

昨年も大学を取り巻く環境の大きな変化を感じながら、材料工学科も推移してきました。陣容としては大きな変化はありませんが、客員教授の古林先生が学部本属となり、新たに大学院に京大の向山先生が客員教授として「電子緩和過程の基礎」という科目を担当されることになりました。学部の科目では、私が「非平衡物質」という講義科目を新たに始めました。アモルファス材料を中心に原理、製法、物性、応用例を概説しています。実験科目でも2年生でコンピューターを使ったデータ解析、数理計算の実習を取り入れることにし、今準備を進めています。

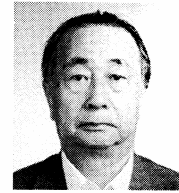
研究面では科学技術基本法の制定で、研究開発に公的資金の飛躍的な増加が計られています。材料工学科では大坂先生が学術振興会の未来開拓型学術研究推進事業の一環で大きな資金を獲得され、材研を中心に展開されつつあります。理工学部の中に今建設中のハイテクリサーチセンターも、国からの資金援助があるものです。

学位は、昨年は課程内1件、課程外6件の計7名の方がめでたく取得されました。博士後期課程の充実には次の大学重点化とも関係する大きな課題ですが、解決しなければならない問題が多々あります。大学院への飛び級進学制度も始まりました。

大学の重点化が国立大学を先頭に進行しつつありますが、早稲田大学でも2000年に向けて理工学部の大学院専攻の再編がホットな議論になってきました。この1～2年に具体化することでしょう。今の大きな変化の中で、早稲田大学が社会に揺るぎない地位を確保していくためには、手をこまねいているわけにはいきません。“材料”という分野は若い人にはイメージが掴みにくいようですが、大学内だけではなく、産業界、とくにOBの方々からの積極的なご意見とご支持をいただき、私立大学の特色を生かした改革にしたいと思っています。われわれも知恵をしぼりますが、OBの方々のご協力を切にお願いいたします。

材研における粉末冶金研究の 思い出

渡辺 尙尚



私は1949年(昭和24年)に応用金属学科を卒業、旧制大学院を経て、通商産業省工業技術院の名古屋工業技術試験所に約9年間在職し、そして1961年(昭和36年)に本学の鑄物研究所にもどって、以来36年間を過ごして参りました。今年1997年3月を以て、先年材料技術研究所と名を改めた当所を退職いたすことになりましたので、専攻してきました粉末冶金に関する思い出の一つをお話したいと思えます。

さて、1961年(昭和36年)当時の当所はその名のごとく鑄物に関する研究が主体ではありましたが、一方、長年にわたってタングステン冶金および超硬合金の研究を続けて来られた若林章治教授〔1974年(昭和49年)本学名誉教授、1990年(平成2年)ご逝去〕、摩擦・摩耗の研究を通じて銅系焼結摩擦材料を検討しておられた葉山房夫教授〔1986年(昭和61年)本学名誉教授〕、それに赴任してきたばかりの銅および鉄系焼結油軸受と焼結機械部品の研究を進めている助教授の私との3研究員が在籍していて、粉末冶金の研究体勢が充実した状況にありました。そこで、粉末冶金技術を積極的に取り入れる企業が逐次増えつつあった当時の業界の動向にかんがみ、かねてからの懸案であった粉末冶金に志す学生、卒業生ならびに学外の研究者、技術者諸氏のためのセミナー“粉末冶金談話会”を、8月の夏季休暇を除いた年11回の会合を当所にて開催することになったのであります。

最初は9名の会員で出発した当会も、それから約36年間、約380回の会合を経た今日では、約165名の会員を数えるまでに成長いたしました。もちろんこのことは、当所および会員各位の一方ならぬご好意や熱意によるものではありませんが、とくに会合毎の会場の設定、案内状の送付、議事録の作成、資料の準備および茶菓の接待など裏方の諸作業を、長年にわたって逐次担当した大学院生、学部卒論生および研究・研修生諸君の代々にわたる連係システムも見事であり、改めて感謝の意を表する次第であります。

当会も私の定年・退職によって、1997年(平成9年)3月の会合をくぎりに、事務局を東京都立工業技術センターの浅見淳一氏〔1970年(昭和45年)金属工業科卒〕の研究室に移し、会員各位の支援によって新たな構想のもとに引継がれることになりました。謹んで当会のいよいよのご発展を祈る次第です。

昭和初期の早稲田・牛込界限

中井 弘



私が早稲田大学の高等学院に入学したのは昭和15年で、今から半世紀以上も前になる。その頃、父は東京にも家を持っていたので、関西出身の私も下宿することなく、その家から通学することになった。その家は牛込北町の電話局の裏にあり、大学まではゆっくり歩いて30分足らずであった。歩いて通学するついでに、早稲田周辺、神楽坂、新宿を殆ど毎日歩き廻っていたので、その時代の早稲田・牛込界限の町の様子が自然に頭の中に入って来て、今でも眼をつむると、その頃の町の佇まいが浮かんでくる。そこで、その頃の町の様子を思い出すままに綴ってみたいと思う。材料工学会の会員も大戦後の卒業生が多くなり、この時代の早稲田界限の様子を覚えている人は少ないであろうが、関東大震災の大きな被害を受けたにも拘わらず、明治、大正の頃の町の面影がまだあちこちに残っていた。

大学へ通う路は何通りかあったが、北町から矢来町を貫けて早稲田鶴巻町へ出るのも、その一つであった。北町から矢来町へ貫けるバス通りには、右側に新潮社があった。この建物は、同社が宗教法人「人の道」から買いとったもので、和洋折衷の瀟洒な二階建てであった。どうして、この建物が印象

に残っているかという、建物のデザインも垢抜けてはいたが、「人の道」の創始者、谷口雅春氏は中学、大学を通しての先輩で、その甥が中学の同級生におり、その上、中学の教師の中に狂信的な彼の信奉者がいて、授業の度にその説法を聞かされ、うんざりした記憶があるからである。バス通りから矢来町の町割りにそって、狭い道路を巡ってゆくと、そこは昔ながらの中産階級の住宅街であった。その町並の一角に、黒塀を高くめぐらした邸宅があった。そこは当時、有名な落語家であった柳家金語楼師匠の住宅で、借金王といわれた彼が、よくこんな立派な家を持てたものかと思いつながら前を通っていった。矢来町を貫けて江戸川橋の市電終点の通りに出ると、すぐ右側の坂の途中で「いてふや」という小さな喫茶店があり、その先に邦画専門の映画館もあった。この「いてふや」は中村メイコちゃんの父上、正常氏の弟さんの経営で、正常氏の同名の「いてふや」よりは繁盛しているとのことであった。この通りから鶴巻町の通りに曲がると、大学までは一直線である。左手に赤城小学校の校門を見ながら、大学の正門（門がないのに正門と言っていた）に向って進み、大学の校舎に近づいて来ると、左右に学生目当ての食堂、喫茶店、書店などが多くなって来る。父の遊学の頃は風俗営業の店が多くて、問題の場所とみなされた時期もあった、と聞く。この近辺で思い出されるのは、左側に学生が世話になることの多かった岡崎病院、早稲田出身の歌手であった東海林太郎氏の弟さんの経営する中華料理店「東瀛閣」、それに何軒かの喫茶店などである。この頃の喫茶店は、銀座の店の支店とか、夏には休業して軽井沢に出品するなどの優雅なものが多かった。右の方には、学生が自分に似合わない髪形を注文すると、怒鳴っておこる怖い親方の経営する「キング堂」という理髪店などがあった。正門前には、丸善の支店、学生や卒業生の間で人気のあったお源婆さんの経営する「稲門堂」という食堂があった。正門前の広場の中央はロータリーになっていて、新橋行きの黄バスの停留場があった。この付近の道路で私が入学する前、卒業直前の理工学部の学生が友人の運転する車に轢かれて死亡する、という痛ましい事故があった。（続く）

新 博士紹介

博士論文題目

津田正臣

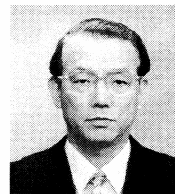
シャドウマスク用 Fe-36%Ni 合金に関する研究

このたびの学位取得に関しては、南雲教授をはじめとする先生方のご指導には大変感謝いたしております。

これでやっと肩の荷がおろせるとともに、学位の取得が遅きに失した感もあり、もう少し早く取得できればとも思いました。学位取得論文に関する研究は10年以上前から着手していましたが、社内の事情からなかなか公開することもできず、「鉄と鋼」等への論文投稿もままならない状況がありやむを得なかったとも思っております。

自分の研究は100年も前に発見された36%Ni合金をシャドウマスク用として新たな用途に適合させるための材料諸問題を金属組織学的に解決したものであります。現在では、自分の研究により開発された製品が会社の大きな商品として育っていることは、研究にたずさわったものとして大きな喜びとするところであります。

このたびの学位取得を機に、新たな気持ちでさらに仕事に邁進したいと思っております。



【略歴】1968年3月 早稲田大学大学院修士課程金属工学専攻修了。
同年4月 日本冶金工業(株)入社。研究部配属(後に研究開発本部技術研究所に改組)
1993年10月 企画室に配属
1995年6月 研究開発本部 研究企画部
1996年6月 取締役研究企画部長就任

博士論文題目

曾我田 佐男

高密度実装はんだ付け継手の機械的信頼性に関する研究

1971年に早大・理工・機械工学科・溶接コース（中根研）を修士で卒業し、同年、(株)日立製作所に入社しました。日立研究所に20年間勤務し、1992年に横浜にある生産技術研究所に転勤して5年になります。その間、はんだ接続を中心とする材料、プロセス、信頼性を含めた電子部品実装に関する研究を担当してきました。LSIを搭載したハイテク製品の実装で日本が世界をリードしてきた分野であることを誇りに思います。この間、社会に役立ち、かつ学問的に未知の分野

を開拓することを念頭においてやってきたつもりです。お陰様で回路実装学会で論文賞を2回受賞できたことは地道な努力の成果と考えます。この学会では身近な最新製品に搭載される最先端の実装がメインテーマになっております。実装は機械、材料、化学、電気等を横串に連携するシステムを必要としています。縦と横との交差点が産学協同の交流の場となり、更に活性化することを期待して締めくくります。



【略歴】 1969年3月早大・理工・機械工学科卒業。1971年3月早大大学院理工学研究科・機械工学専攻・溶接専修コース修士卒業。1971年4月(株)日立製作所入社、日立研究所第5部に配属。1984年日立研究所第5部主任研究員。1992年生産技術研究所民生実装センター主任研究員。1997年生産技術研究所実装センター主任研究員。
この間、電子部品（LSI等）のワイヤボンディング、LSI実装、はんだ接続法、はんだ材料開発、接続部の信頼性評価解析を担当。

博士論文題目

堺 邦益

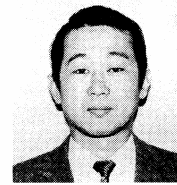
機械構造用金属部材の複合化に関する研究

この度の学位取得にあたり、終始懇意なるご指導を賜った中江秀雄教授に深く深謝の意を表すとともに、ご専門の立場からご指導を頂いた渡辺伏尚教授、齋藤良行教授ならびに伊藤公久教授には謹んで深謝致します。

本論文は、船用大型ディーゼルエンジンのシリンダーライナを主対象に、鋳造による金属の複合化法である鑄ぐるみについて研究したものです。実験室での基礎研究および実製品の調査などから接合機構の解明、製造条件の確立を行い、実

製品での疲労強度など材料特性について述べました。近年、機械装置の高性能化のため材料技術に期待されるところが多いのですが、要求性能が高く、材料の開発が追いついていかない分野もあり、鋳造法による金属部材の複合化はひとつの解決法として期待されるところが多いと思われま。本研究がこの分野の進歩に役だってくれることを期待しております。

今回の学位の取得を励みとし、より一層努力していきたいと思ひます。



【略歴】 昭和43年 早稲田大学理工学部金属工学科卒業。川崎重工業(株)入社。技術研究所材料研究部配属、機械構造用金属材料の特性と製造法に関する研究開発に従事
平成9年 川重検査サービス 株式会社 技術部 主任

博士論文題目

藤木 章

モリブデン鋼系耐摩耗焼結材料の製造ならびにそれらのエンジンへの応用に関する研究

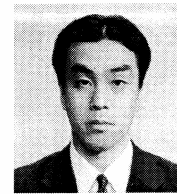
この度の学位取得にあたり、終始懇意なるご指導を賜りました渡辺伏尚教授に心より感謝申し上げます。また本論文をまとめるにあたり有益なご助言をいただいた南雲道彦教授、中江秀雄教授ならびに堀部進教授に深く感謝致します。またトライボロジー全般についてご指導いただいた葉山辰夫名誉教授に深く感謝致します。

この研究は1980年代半ばより始まった、自動車用エンジンの高性能化、高出

力化、良燃費化の開発競争にありました。当時研究がスタートした時に社内外の早大の先輩方々のお力を借りました。この紙面を借りて感謝致します。

子供の頃から夢見ている工学博士の学位を母校早稲田で取得できたことは大きな喜びであります。

今後はこの学位に恥じぬように、社会に貢献できるような仕事ができるよう努力していきたいと思ひます。



【略歴】 昭和56年3月 早稲田大学理工学部金属工学科卒業。昭和58年3月 同大学院理工学研究科修士課程修了。同年4月 日産自動車(株)入社。中央研究所材料研究所 車両開発本部材料技術部第二技術部を経て技術開発センターに勤務、粉末冶金技術の研究・開発に従事。

博士論文題目

中村修一

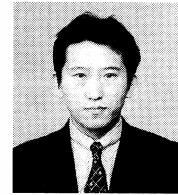
多結晶の位相構造に関する研究

この度の学位取得にあたり、始終懇切なるご指導を賜りました北田韶彦教授に心より感謝申し上げます。また、本論文をまとめるにあたり、貴重なご助言を頂きました小山泰正教授、宇田広之教授、一ノ瀬昇教授、大坂敏明教授、斎藤良行教授、入江昭二教授に深く感謝致します。

本論文では、未だ十分に整備されているとは言い難い多結晶を扱う方法論を確立するため、多結晶を位相空間として扱う方法を提案しました。この位相空間と

しての多結晶は、多結晶を扱う際の議論の場となるものです。この議論の場ができたことにより、昨今注目されております自己相似構造の存在を多結晶において示すことができました。

今回の論文作成にあたり、土台をしっかり築くことの大切さを改めて実感することができました。今後も、礎の強化を怠らず、自分なりの花を咲かせることができるよう努力を積み重ねてまいる所存でございます。



【略歴】
平成3年3月 早稲田大学理工学部材料工学科卒業
平成5年3月 同大学院修士課程終了
平成5年4月 同大学院博士後期課程入学
平成8年3月 同大学院博士後期課程退学
平成8年4月より同大学理工学部助手
現在に至る。

博士論文題目

佐藤健二

溶融Al合金とSiCとの濡れと反応に関する研究

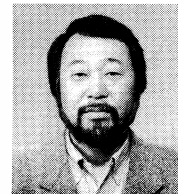
鋳物を始めた頃、近くの鋳物工場の親爺さんから、鋳鉄の勉強を兼ねて手伝いに来て欲しいと電話が入った。炬は背の低い甌（こしき）炬、川口から溶解を担当する炊き屋さんが来て、竹ざるに盛った鋳物銑、コークス、ライムなどの塊を頃合いを見て次々に炉に投入する。取鍋に出湯するが、湯が足りない。湯待ちの間、湯面を丸めた新聞紙を燃やして覆い、次の湯が沸いた頃、さらに注ぎ足し、乾燥型へ鋳込んだ。

キューボラが低周波炉に替わり、生型の自動造型ラインが主流だった時代にこれを体験した。この製品はうちでしか出来ないと言った親爺さんの経験からきた技術の高さとその技術に対する自負心に一種のカルチャーショックを覚えた。

アルミ鋳物のノウハウを教えてもらった師匠がいる。その人の口癖は「サドー君、頭でっかちになっちゃだめだ。鋳物は製品にならなきゃだめだ」と。師匠には、もの作りの際の工夫の大事さと修行の大切さを習った。

中江先生には、鋳造現場の様々な現象を良く観ることとそれを解析するときの基礎的な考え方、そしておおらかに飲む楽しい酒の飲み方を教わった。

こうして鋳物をやりながら色んな人に出会い、鋳物の話をしながら、美味しい酒を飲む楽しみを知った。先生や師匠から学んだことは、鋳物を作る際の技術ばかりでなく、人間死ぬまで修行であるという生き方の様な気がする。



【略歴】
1973年 秋田大学鉱山学部冶金学科卒業
1973年 東京都立工業技術センター入所
1986年 早稲田大学鋳物研究所特別研究員兼任
1994年 早稲田大学材料技術研究所客員研究員兼任
1996年 東京都城南振興センター主任研究員
現在に至る。

博士論文題目

山内利夫

繊維成形体への溶融アルミニウムの加圧含浸挙動の研究

早稲田大学から学位を頂き、名誉と重みを感じる今日この頃です。審査して下さい先生方にこの場をかりて改めてお礼を申し上げます。82年にスズキ株式会社開発部に入社して以来、スクイズキャスト法によるアルミニウム基複合材料の研究開発に従事してきました。90年にはこの材料を使用した2サイクルエンジン用ピストンが実用化しました。社内的には複合材料が既存材の仲間入りした年であったともいえます。92年から約1年半

は工業技術院名古屋工業技術研究所にて、繊維成形体への溶融アルミニウムの加圧含浸挙動について解析を行いました。ここで含浸過程で発生する成形体の圧縮変形メカニズムを理論的に解明し、生産での問題点解決に貢献しました。そして、社に戻ってからこれらの研究をまとめるに至りました。今後はさらに研究開発を進め、複合材料を使用した製品を一つでも多く実用化するために努力する所存です。



【略歴】
昭和57年3月 関西大学工学部金属工学科卒業
昭和57年4月 鈴木自動車工業株式会社(現:スズキ株式会社)入社
平成4年5月 通商産業省工業技術院名古屋工業技術試験所(現:名古屋工業技術研究所)出向
平成5年11月 スズキ株式会社開発第二部勤務
現在に至る

就職担当を終えて

堀部 進

「景気回復か、大手企業採用枠大幅拡大」こんな新聞見出しで始まった今年の就職戦線も終了し、材料工学科卒業生と大学院修士課程修了生あわせて81名は間もなくそれぞれの新天地で社会人としてのスタートを切ろうとしている。材料工学科卒業生の就職先は近年極めて多様化してきた。とくに電気・電子・通信分野への就職が増加し、今やこの数が従来主流であった鉄鋼・非鉄材料、重工業・機械関連企業へのそれに匹敵する状況となったのが一つの大きな特徴であろう。なお、材料工学科ではここ数年大学院への進学率が増加し、今年は卒業生の71%が進学することになっている。とにかく表面的な数の上では当学科の就職・進学状況はすこぶる好調であるが、今年度の就職担当を終え、感じたことを少し綴りたい。

本学科学生の内定企業の多くはいわゆる「学校推薦制」としている。これは企業が大学に適当な人材の推薦を依頼し、とりたてて問題がない限りその学生を採用するというシステムであり、企業と大学の信頼関係の上に成り立っている。長年にわたりこのシステムでの採用率は100%に極めて近いものであったが、ここ数年この値は大きく低下してきている。この傾向は本学だけではなく他大学でも同様である。学生にとっては、志望企業への学校推薦を受け、他企業への就職活動を自粛させられた揚げ句に、不採用と言われては泣くに泣けない。採用率100%が達成されない限りこの「学校推薦制」はいずれ崩壊することになるのではなかろうか。

また企業の方から「即戦力のある学生を」との要望がよくあるのには驚かされる。逆に早稲田の在野精神をあげて、「是非とも早稲田から」という人事担当者が意外に少ないのは残念である。それだけ日本経済は低迷しているのであろうが、専門学校ならいざ知らず、我々教員は4年以上かけて学生をじっくり育てているのである。「たまごっち」ではないのだから。

いろいろな企業の様々な立場の方々と接する機会を得たが、日本の企業にゆとりがなくなってきたのを感じざるを得ない。昨今の株価の急落そして円安の進行は、日本経済が世界からの信頼を失いつつあることの現れでもある。完全失業率も3.4%という高い値が報告されており、これは就職難とリストラに直撃された青年層と中高年層の実態を反映しているらしい。このような社会環境の中で、丹精込めて育て上げた学生をどのようにして本当に信頼できる企業に送り込むことができるか。就職担当教員に確かな目が要求される時代がきている。

材料工学会への寄付

木川武彦 様(金工昭41) 中村茂弘 様(金工昭43) 宮崎正行 様(金工昭60)

編集後記

材工学会員は4千名を超える規模になりました。卒業なさった諸先輩と大学・現役との架け橋がこの会報です。渡辺尙先生は今年度御退任です。先生に鑄研の思い出を綴っていただきました。また中井弘先生に昭和初期の早稲田界隈を綴っていただきました。当時青春を謳歌した諸先輩には懐かしい思い出が蘇ると思います。

本年は理工学部創立90周年です。10月10日の祝賀会では材工学会も企画を考えております。材工学会総会とともにこちらにもふるってご参加下さい。

発行所 早稲田材料工学会 〒169 東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学理工学部55号館S02-01 TEL03-3203-4141 (大代表)
FAX03-3200-2567